



302号
2025/4

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



上海 NOW : 8年ぶりの上海、街がキレイに見えた。旧租界の一角にそびえる「武康大楼」1920年代にできた歴史的建造物で、周囲の路上は建物を目当てにスマホを構える観光客で賑わっていた。彼らの殆どが撮った画像をSNSにアップして「いいね」を競う网红（インフルエンサー）だ。网红、网购（ネット通販）、スマホ決済…スマホが全ての今。
(2025年2月 上海旧フランス租界にて 高橋節子)

'わんりい' 2025年4月号の目次は18ページにあります

中医薬膳の起源と発展 (2)

ちよ てき
趙 迪

中国における薬膳

先秦時代から近現代までの薬膳の発展を中国の歴史の中から pick up して見ましょう。

- 先秦時代**：『周礼』には「食医」という職業が記録され、王室のために特別な食事を調整し、養生や病気の治療を目的としていた。これは薬膳が公的に活用された最も早い例である。
- 漢代**：東漢の名医・張仲景が『傷寒雑病論』において、「桂枝湯」や「当帰生姜羊肉湯」などの薬膳レシピを詳しく記述し、治療に活用した。
- 唐代**：名医・孫思邈が『千金要方』の中で薬膳の理論と実践を体系化し、「食治」の概念を提唱。
- 宋元時代**：薬膳が民間にも普及し、宮廷薬膳が確立。
- 明清時代**：李時珍の『本草綱目』が薬膳の発展に大きく貢献。
- 近現代**：健康意識の高まりにより、薬膳が再び注目され、国際化が進んでいる。

このように、中医薬膳は長い歴史の中で発展し続け、現代のライフスタイルにも取り入れられ、活用されています。

逸話と豆知識

次に、日本における中医の導入と変遷です。

『日本書紀』によると、7世紀に遣唐使が中医薬膳の概念を日本に持ち帰り、皇室や貴族の間で重視されました。平安時代の貴族は、薬膳を健康維持のためだけでなく、身分や品格の象徴としても捉えています。



様々なスパイス(百度图片より)

した。

興味深いことに、日本の薬膳でよく使われる味噌は、もともと中国から伝わった「醬」が日本独自に発展したものとされ、現在では重要な調味料の一つとなっています。

古書に見る薬膳の記録：日本最古の医学書『医心方』には、「飲食は人の大欲であり、慎重に選ばなければならない」とあり、日本の古代薬物類書『本草和名』には「薬食同源、食養を第一とすべし」と書かれています。

明治維新时期には西洋医学の影響で一時薬膳が衰退しましたが、近年の健康ブームにより、薬膳が再び注目されるようになりました。現在では、現代栄養学と融合し、現代人のライフスタイルに適した養生法として発展し、薬膳レストランや薬膳茶が人気を集め、国際的にも注目されるようになっています。

世界の薬膳文化

世界各地でも、薬膳はその姿を地域に合った形に変え、日常生活に取り入れられています。

- インドのアーユル・ヴェーダ**：インドの伝統医療アーユル・ヴェーダの中では、各自の体質に合わせた食材や調理法を推奨し、ウコンやシナモンなどのスパイスが広く用いられている。
- 地中海食**：オリーブオイル、魚、野菜、全粒穀物を中心とした食事法で、「心血管の健康に最適」とされる。低脂肪・高繊維を特徴とし、食材の自然な性質を重視。
- 韓国の薬膳**：高麗人参、ナツメ、生姜などを多用し、滋養強壮を目的とする。特に「参鶏湯」は夏場の滋養食として有名。
- 欧米の機能性食品**：欧米では、スーパーフードや栄養補助食品が現代の薬膳として人気。ブルーベリー、チアシード、キヌアなどが高い栄養価を持つ食品として注目されている。

このように薬膳は、古代から人類の健康を支え、維持するのにも貢献している基本理念なのです。

鄭州・安陽の一人旅(つづき2)

文と写真=村上直樹

去る 2025 年 2 月 22 日に、世界 3 大映画祭の 1 つベルリン国際映画祭(第 75 回)の各種受賞の発表があり、霍猛監督による中国映画『生息之地』(英語名:Living the Land)が長編コンペティション部門の最優秀監督賞(銀熊賞)に輝いた。私はまだ鑑賞する機会に恵まれていないが、ネット情報によると、この映画の舞台は 1991 年の河南省周口市霸王台村であり、10 歳の少年の目を通して当時の農村生活が描かれている。使用言語は河南方言である。プロデューサーの一人として、かつてのテレビドラマ「武林外伝」や「潜伏」で主役を演じた姚晨が参加していることでも話題となった(私もこれらのテレビドラマは DVD で観た)。日本の場合でもそうであるが、映画の評価はしばしば製作国の国内と海外(おもに西欧)との間でかなり異なる。今回の場合はどうか、いずれにしても、130 分ほどの全編を早く観てみたいと思っている。

さて、ここからは前回(2025 年 3 月号)のつづきである。昨年(2024 年)11 月 25 日、私は河南省安陽市の殷墟遺跡を訪れ、午前 11 時前に博物館(新館)に入って、今から 3300 年ほど前の殷(商)代後期の遺跡・出土文物に接していた。3 階で「子何人哉」(子とはどんな人でしょう)と題する、1991 年 10 月に殷墟花園庄東地で発見された甲骨片の特別展示を見終わったところで空腹を感じたので参観を中断し、1 階の附設レストラン「子飧餐厅」

で昼食をとることにした。注文したのは「牛肉甲骨麵豆腐串」(36 元)。平たい麵に甲骨文字が書かれていた(左下写真)。食後は 3 階に戻り、「世界的商文明」と題された展示室に入る。

この部屋では、海外における甲骨文字に関する研究動向が紹介されている。その中で「流散海外甲骨統計表」という興味深いパネル展示があった。海外に散逸している甲骨片の数量についてかなり詳細に示したものである。ただし、(私が見落とししていない限り)調査の時点・方法などは説明されていなかった。おそらく、さまざまな情報源からのデータを整理したのであろう。

やや詳しく紹介すると、国別の総数として、イギリス(3,377 片)、フランス(64)、アメリカ(1,882)、カナダ(7,802)、ドイツ(715)、スウェーデン(100)、スイス(99)、ベルギー(7)、韓国(6)、シンガポール(28)、ロシア(199)、日本(12,762)(パネルの記載順)となっており、さらに、具体的な機関、大学、個人等の内訳が記されている。日本の所蔵数が多いのは戦前からのさまざまな経緯によるものと思われる。たとえば、甲骨文字研究の発展に多大な功績のあった「甲骨四堂」のうち、羅振玉(1866~1940)、王国維(1877~1927)、郭沫若(1892~1978)の 3 人が一時期、日本で研究活動を行っていた。日本国内で最も多く所蔵しているのは京都大学人文科学研究所の 3,599 片である。以下、東京大学東洋文化研究所(1,641)、天理大学附属天理参考館(809)、東京書道博物館(600)、東洋文庫(591)と続いており、桃山中学(1)まで 31 の所蔵機関が挙げられている(なお、名称はパネル記載のママ)。つづいて個人所有の分として三井源右衛門氏の 3,000 片を筆頭に、31 人の名が挙げられていた。

話はやや逸れるが、昨年(2024 年)が 1999 年に甲骨文字が発見されてから 125 周年に当たるのを記念して、『河南日報』紙では同年 8 月 14 日(水)から週に 1 回のペースで「了不起的甲骨文」(驚異



レストラン「子飧餐厅」にて(2024年11月撮影)

の甲骨文)と題した特別ページ(特刊)を続けており、甲骨文字に関わるさまざまな話題を取り上げている。その9月4日付紙面には「回家吧! 海外『流浪』的甲骨)(帰っていらっしやい! 海外『放浪』の甲骨よ)」という見出し記事がある。上で紹介した博物館の展示と直接の関係はないが、その記事では安陽師範学院甲骨文情報(情報)処理教育部重点実験室主任・劉永革氏のグループにより、海外に流出した甲骨片をデジタル化技術を使ってデータベース化するプロジェクトが進行していると報じられている。劉氏によると今後5年から8年をかけて、世界各国に流出している甲骨片の故郷・安陽殷墟への里帰りを目指しているそうである。

3階の別の部屋では「墨舞千年一甲骨文書法篆刻精品展」も開催されており40点ほどの甲骨文書道・篆刻作品が展示されていた。「沈浸式デジタル体験展示ホール」を除くほぼ全ての展示を見た後、1階のお土産コーナー(礼文宮文創商店)に立ち寄った。前述した『河南日報』の特別ページでは11月20日に、このお土産コーナーを話題として取り上げており、2023年大学卒の若い文創デザイナー(文化クリエイティブデザイナー)郭嘉欣氏による子供向けの可愛い縫いぐるみが紹介されていた。当日は残念ながら郭氏は不在だった。私は「福」と甲骨文字で書かれたお守り(20元=約400円)を買って、博物館を出た。時刻は午後3時を回っていた。

タクシーで一旦ホテルに戻り、すぐ出直して近くの安陽市文化館へ昨日ネットで偶然見つけた「全国甲骨文書法名家邀請(招待)展」という甲骨文書道の展覧会を見に行く。全国から招待された20人余りの書道家による約280点の作品が展示されていた。羅振玉の孫である羅琳北京民族大学客員教授・安陽殷商文化研究会榮譽會長もその1人である。写真は羅琳氏の作品で、「春游



羅琳氏の作品
(2024年11月撮影)



殷墟宮殿宗廟遺跡にて(2024年11月撮影)

(遊)」と書かれている。もとより専門的なことは私にはわからないが、全体として、たとえば博物館で見た「精品展」と比べて、こちらの展覧会の作品は一つ一つの文字、構成など、より表現が自由なように感じた。中国における甲骨文書道の新しい潮流と言えるのかもしれない。

翌11月26日は朝から再び殷墟遺跡に向かう。昨日とは打って変わった快晴である。2日目のこの日はまず「殷墟宮殿宗廟遺跡」を見学する。場所は「殷墟博物館(新館)」に隣接している。ここは殷墟の主要部分であり、約70万平米の広々とした敷地に重要な遺跡・関連施設が点在している。正門を入ると「甲骨文発現(発見)地」と書かれた石碑が立っており(写真)、その先には殷墟の出土品の象徴である「^シ母^マ戊^ブ鼎」の大きなレプリカがでんと構えていた。左手に進み「婦好墓」を目指す。婦好は商代中興の祖・武丁の妃である。墓の遺跡の前には立像とともに「王后、母親、女将(オカミではなく、女性将軍の意)」とその人物像が簡潔に記されていた。墓全体が復元され、地下に降りて見学できる。展示パネルの説明によると、この遺跡は1976年に発掘され、青銅器、玉器、宝石器、骨器、陶器といった副葬品が1,900点余り、他に貨幣としての貝殻6,800点が埋蔵されている。そして、青銅器の銘文、甲骨片の卜辞中の記載から、この墓の主が婦好に他ならないと特定されたのである。これは商代の王室構成員の墓として唯一保存が完全なものであり、商代における社会、経済、政治、文化芸術等について知る上で貴重な価値を有する。(つづく)

先日、国立東京博物館に「大覚寺展」(2025.1.21～3.16)を観に行った。大覚寺は嵯峨天皇の信任を得ていた空海が、離宮内に五大明王を安置する持仏堂の五覚院を建て、修法を行ったのがその起源とされる。皇室ゆかりの寺院であり、真言宗大覚寺派の大本山である。

空海が唐から伝えた密教は大乗仏教の思想やヒンドゥー教の影響を受けて、7世紀頃にインドで誕生し、インド密教は8世紀にかけて隆盛になった。

——チベットでは7世紀から14世紀にかけて、インドから仏教が直接に伝来したので、後期密教が継承され、呪術性が強く、儀礼を重視して複雑な神仏の造形と体系が生み出され、それがブータン、ネパール、インド北部、モンゴルにも伝播し、モンゴルは第二の中心地となった。(ウィキペディア)

大覚寺の本尊は「五大明王」であるが、「明王」とは最高仏尊の「大日如来」の命を受け、仏教に帰依しない民衆を教え導く役割を担った仏尊である。「不動明王」は強情な民衆を力づくでも帰依させる為、「大日如来」が自ら変化した仏であるとも伝えられる。

今回、展示されていたのは室町時代の「院信」による(うち2体は江戸時代に改作)「五大明王」であった。左から「大威徳明王(西)」、「軍荼利明王(南)」、真ん中に「不動明王」、その右に「金剛夜叉明王(北)」、「降三世明王(東)」と並んでいたが、本来は()内に示したように、不動明王を中心に四方に配置される。

薄暗い照明の下で、背中に火焰を背負い、凄まじい怒りの形相で、法衣の片袖を破って六臂或いは八臂で、手に手に武器を持つ(大威徳明王はそれに加えて6本の足)、異形の仏像に見下ろされ、些か恐怖を禁じ得ない。普段、目にする仏像の慈愛、慈悲の表情とは大違いだ。

——怒りに燃えた「憤怒の相」は、「仏教に帰依しない

民衆を畏怖させてでも教えに帰依させんとする気迫」、「仏教に帰依せず、仮の快樂に心浮かれている民衆の有り様に対する内心の悲しみ」、「仏界を脅かす煩惱や教えを踏みにじる悪に対する護法の怒り」等を表現したものであるという。(ウィキペディア)

■中央寺院の壁に架けられたタンカ

多くの仏像が安置された中央祭壇の周囲や左右の壁は赤レンガ色で、そこに架けられていたのは、日本国内の展覧会等でも何度か目にしたことがある、煌びやかで、色彩豊かで、緻密なタンカであった。ただし、壁面は全てガラス張りになっていた(外からの光が反射して、まともな写真は殆ど撮れなかった)。

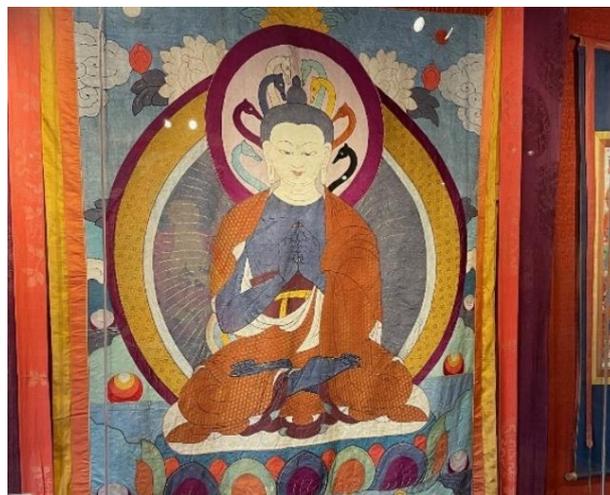
——タンカとは、チベット仏教の仏画の掛軸の総称である。主にチベットで作られたものを指すが、チベット仏教を信仰するモンゴルや中国でも製作された。初期のタンカは大きさ、形状、画題などが確立されていないが、時代が下るに従って形式が定まってきた、典型的なのは綿布を白土で塗りつぶして表面を平滑に顔料で絵を描き、絹の表装(下地)に縫い付けたものである。タンカは元々、仏教の僧が村々を回って仏教教義や釈迦の伝記などを解説するために作られ、持ち運びが便利のように掛軸にされた。15世紀以降のタンカは、構造がほぼ定まって、紺や黒の表装(下地)の上に別途描いておいた絵を縫い付け、絵の枠として外側が黄、内側が赤の布を縫い付けるのが一般的である。絵の直下に縫い付けられた布は

「窓」と呼ばれ、特に豪華なものが使われる。(ウィキペディア)

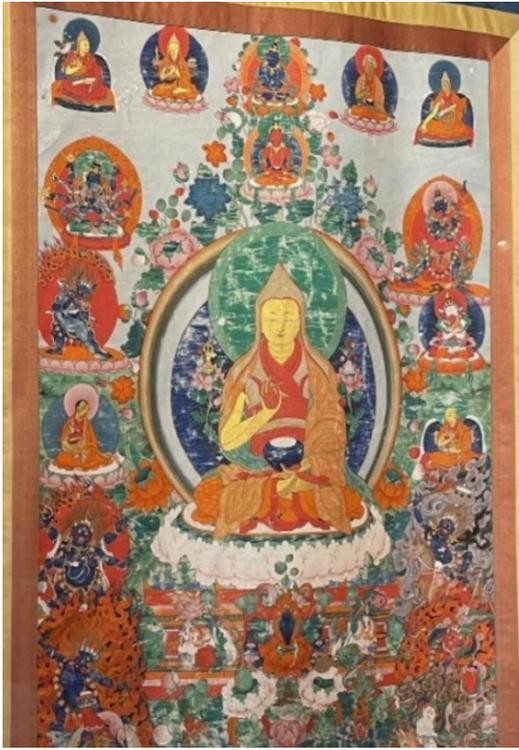
しかし、此処にあるタンカには絵の枠として外側が黄、内側が赤の布を縫い付けてあるが、タンカの下「窓」と呼ばれる豪華な飾りは見あたらない。

■釈迦如来と尊師のタンカ

周囲のものより断然大きく、中心的と思われるタンカ



「釈迦如来(仏陀)」の姿と思われたタンカ



「尊師」の姿と宗教上の関係性を表すタンカ



「明王」2体と武人のような仏尊

ずれの宗派か？ 師弟関係（転生？）がどうなっているか？ 崇める仏尊は何か？ などについて一目瞭然となるのであろう。エルデネ・ゾーが造営されたのは16世紀の後半であり、その当時はサキユ派に属したが、後になってからはゲルク派に改宗したという。となれば、此処にある、これらのタンカはすべて改宗後の時代のものということだろうか。

■もしや「五大明王」のうちの誰かか？

中央の尊師は頭に薄茶色の頭巾を被り、赤色の衣に茶色の袈裟を着け、右手は仏像のように胸の前で手のひらを正面に向け、左手に托鉢の碗のようなものを載せ、蓮の花で飾られた台

座の上で結跏趺坐をしている。台座の下方はとりどりの花が溢れている。

タンカの最上部には4人の尊師（祖師？）と、中央には最高位と思われる仏尊が2体描かれている。

それらの下、尊師の左右の位置には異形の仏尊がそれぞれ2体ずつとそれらの下に尊師が1名ずつ描かれている。

さらに下の左側に描かれているものを見て、一瞬、青鬼かと思った。しかし、青黒い肌に三つの目、繫げた髑髏をぶら下げ、手には数珠や武器を持ち、背中に火焰を背負っている姿を見て、“これらは明王に違いない”と思った。

上の明王の手は六臂のようであり、下の明王は「角」が生え、顔は牛の顔をしている。

さらに良く見ると、その足元には、牛のような動物の顔とともに、髭を生やし、甲冑を着けた武人のような姿が見えた。（上右の写真）

このようなタンカの中に一般の人々が描かれることは考えられない、とすれば、やはり「仏尊」の一人と考えざるを得ない。このような出で立ちで思い着くのは「毘沙門天」や「帝釈天」であるが、どのような関連を持つのだろうかと思った。（つづく）

●資料：

- ・「地球の歩き方 モンゴル」（2024年～2025年版）株式会社 地球の歩き方

がいくつかあった。その中には「頭は出家前の丸く結い上げた髪型、額に第三の目とも呼ばれる「白毫」、台座の上で足を結跏趺坐に組み、両手を胸の前で合わせて印を結ぶ姿や、後光を背負っていて、頭部の周りに8つのへびの鎌首が描かれているものがあり、これは修行の末に悟りを得て、仏教を開いた「釈迦如来（仏陀）」に違いないと思った。

有料のゴルバン・ゾー内にはガイドは同行しておらず、持参のガイドブックにも、こうしたタンカの詳しい情報は皆無なので、想像を逞しくするしか方法が無かった。

この堂内には釈迦の仏像があり、釈迦のタンカもあることになるが、同時に両方が存在する必要性は無く、これはやはり、布教で使用されてきたタンカや廃止された寺院のタンカが集められた結果ではないかと考えられた。

複数のタンカには位の高い僧侶（尊師）が描かれているようであった。タンカによって、中央に描かれた尊師はそれぞれ異なっているようであった。

——チベット仏教にはニンマ派、カギユ派、サキヤ派、ゲルク派の4大宗派が存在し、いずれも顕教と密教の併修を柱とするのは共通だが、密教の最奥義に相当するものは異なり、各派に思想的特徴が見られるという。（ウィキペディア）

タンカの内容を見れば、この尊師は誰なのか？ い

八 哥（九 官 鳥）

訳：一瀬靖子／大槻一枝

劉善りゅうぜんという左官職人が九官鳥を飼っていた。この九官鳥はとても賢く、毎朝窓辺に飛んできては「兄さん、お早う。お日様が出た、いい日だよ、いい日だよ」と叫ぶ。

この年、県太爺（県の知事）の家が建て替えられることになり、九官鳥も新築現場で働く劉善について、毎日現場に来ていた。劉善が高いところに登って外壁の彫刻をしていると、九官鳥は傍らに佇んでモデルになり、劉善が地面に置き忘れた筆はすぐ飛び降りてくわえて来た。劉善が危ないところに立っていると九官鳥は傍らから、「兄さん、気をつけて！ 気をつけて！」と叫ぶ。職人たちもみな可愛がり、人の言葉を教えたり歌を教えたりした。

その日、劉善は壁に“福祿寿星”を描こうとしていると、県知事が現場を訪れて劉善に声をかけた。「この壁には何を描くつもりなのかね？」。

劉善は、「福祿寿星を・・・」、すると、九官鳥がたちまち口を合わせて、「福祿寿星、福祿、寿星」と叫んだ。知事は非常に喜び、「この九官鳥は誰が飼っているのか」と尋ねた。

劉善が「私です」と答えると、県知事は長い髭を撫でながら、九官鳥を手招きし、「こっちへ来い。美味しいものをやるぞ」。しかし九官鳥はパタパタと飛び去ってしまい、知事もその場を去った。

翌日、知事の執事が劉善に、「県知事閣下が九官鳥を欲しいと言っておられる。褒美として十両取らせるとのことである」と伝えた。しかし劉善は、「どうぞ知事閣下にお伝えください。この九官鳥はお売りができません」

九官鳥も梁の上から、「売りません。九官鳥は売りません」と口を揃える。執事は何と言っても聞いて貰

えないので、あきらめて帰って行った。

その年の中秋節の頃、劉善は熱病にかかり、仕方なく病が治ったらすぐ返すという条件のもとに、知事から五両の銀貨を借りた。しかし思いの外、熱病は二カ月余りに長引き、仕事も進まず借金の返済に手間取ってしまった。冬月（旧暦の十一月）、知事が引越



八哥(百度百科より)

しを予定していた時期になっても、東廂（中国伝来の家の建て方。中庭を囲んで東側の部屋）の壁は完成されず、大いに腹を立てた知事は手下の兵を向かわせて劉善を捕らえ、五両の銀貨と九官鳥を差し出すように命じた。

哀れな劉善は困り果てたが、五両の銀を返済することもままならず、九官鳥を差し出すことも出来ず、投獄の憂き目に遭うことになってしまった。

九官鳥は主人の身を案じて探し回った。ある日、とある穴を見つけて潜り込み、劉善を見つけ出した。九官鳥は劉善の肩に飛びあがって喜び羽ばたいた。劉善は胸を打たれ、思わず感激の涙を流した。

「九官鳥よ、私はお前のことをどんなに心配していたか。知事は毎日、私を吊るし上げて鞭打った。私の手を天秤棒に挟んで骨折させ、お前をよこせと迫った。私はお前が小さい時から育てて来たのだ。どうしても人手に渡すことができよう」。九官鳥はこれ聞いてしきりにうなずいた。

その後、九官鳥は毎日飛んできて劉善に語り掛け、彼を慰めた。しかしある日、その話を看守に聞かれました。看守は直ちに獄吏に、獄吏は知事に上奏した。間もなく知事が牢獄にやってきた。九官鳥はすぐに梁に飛びあがり、捕らえようとする兵士の手をかいくぐって、大きな声で叫んだ。

「知事は庶民を欺いたが、九官鳥の私には手が出せ

ない。カー！」と言うと飛び去って行った。激怒した知事は、三日以内に九官鳥を捕らえよ！と命じた。役所の兵卒は上を下への大騒ぎ、木の上、屋根の上、いたるところ探し回ったが、九官鳥は影も形もない。

その夜、九官鳥は又こっそり劉善に会いに牢獄へ飛んできた。劉善と九官鳥が楽しく話し合っていると、水も漏らさぬ警戒態勢を固めていた兵卒たちが、九官鳥を捕らえ、知事へ差し出した。知事は髭を撫でながら、「九官鳥よ、今度は逃げられまい」。

九官鳥は何食わぬ様子で、籠に捕らえられたまま鳴き声も出さない。知事はむかついて、「お前の肉を食いたいと言ったら、お前は どうする？ 炒めて食われないか、煮て食われないか、どっちだ？」。

九官鳥は焦らず、慌てずゆっくりと口を開いた。「ああ、どうぞ食べてください。知事閣下は人の肉を食べ、人の血を吸い、そしてある日、貴方は頭の骨まで野良犬に食われてしまうでしょう！」。

これを聞いた知事は爆竹のように怒った。「おのれ！ 大馬鹿野郎め！ 今すぐ、この黒い鳥を生きながら醤油漬けにして、煮え立つ油で揚げてしまえ」。

調理人が急ぎ九官鳥の羽毛を抜き取ったが、赤く焼けた鍋にはまだ油が入っていない。骨を斬る包丁を持って来て、九官鳥をまな板に押さえつけ、鍋に油を入れようと体の向きを変えた。九官鳥はこのチャンスに必死で手を逃れ、羽ばたいたが飛び上がることは出来なかった。九官鳥は両足で跳ねとび、水洞から下水道の中に落ちた。可哀そうな九官鳥は、下水道の中で一年を過ごさなければならなかった。臭い水の中から流れて来る米などを啄んで飢餓に耐えた。春になり九官鳥の体に羽毛が生え始めた。

ある日、九官鳥は人気のないのを確かめて下水道を飛び出し、劉善を探し始めた。劉善は、去年、脱獄し山深いところで人知れず畑を耕していたので、九官鳥が城外の隅々まで探したが見つからない。

その日、九官鳥が大通りを飛んでいると、銅鑼や笛の音を響かせて行く賑やかな一行に出会った。屋根瓦に止まって様子を窺うと、それは知事が城隍廟にお参りする行列だった。九官鳥は急いで廟の方へ飛んだ。ちょうど知事が線香を立て、供物を並べ、跪いて祈りを捧げるところだった。どこからともなく城隍菩薩の厳かな声が聞こえて来た。

「最近、村の庶民たちが訴えるところによれば、お前は賄賂を取り、法を曲げ、やりたい放題で庶民を苦しめているそうだな」。

知事はこれを聞いて冷や汗をかいた。パタッと地に伏し、頭を地に打ち付け、よよと泣き崩れた。

城隍菩薩はまた口を開き、「お前は正直に自分の行った悪事を認めなければならない。そうすれば、私はお前を許すかもしれないが、お前が少しでも隠し立てをするなら、その命はないものと思え！」。

知事は泣きながら頭を地に打ち付け、自分の悪事を白状した。この時、城隍菩薩が「お前はそうに多くの悪事を働いた。当然、お前を許すわけにはゆかぬ。しかし罪を犯したものがそれを認めるなら、罪は軽くしてやらねばなるまい」と言ったのを聞いて、彼は少なからずホッと、磕頭(ke tou/自分の頭を地に打ち付けて罪を認めるやり方)を続けた。

城隍菩薩はまた、「ひとつ、お前のその髭を取り除いてしまえ。そうすれば庶民の前で偉ぶることもできないだろう」。知事はすぐに髭を抜き始めた。口の周りも、下顎も、耳の周りも綺麗になった。すると城隍菩薩がまた、「二つ、私に向かって三百六十五回の音の響く磕頭を続けよ。そして磕頭とはどんなものか味わうのだ。庶民がどんな目に遭っているのか分かるだろう」。

三百六十五回の磕頭が終わった時、頭に血を滲ませて知事は気を失っていた。

この時、後ろの屋根の上から声が聞こえて来た。「知事閣下、私ですよ。去年、私は羽を抜かれ、今年は閣下が髭を抜かれた。去年、劉善が骨を折られたが、今日は私がお前の頭をたたき割った」。

知事が頭を上げて見ると、あの九官鳥だった。九官鳥は翼を広げ、空中を飛び去っていった。 おわり
漢族の民話(整理:李良)

訳者注:(九官鳥, Gracula religiosa)は、鳥綱スズメ目ムクドリ科キュウカンチョウ属に分類される鳥類。他の鳥の声や簡単な人語を真似することが出来る。名前の由来は、両翼に白い翼斑があり、飛行中に非常に目立ち、「八」の字に見えるからである。(百度百科)

日本で「九官鳥」と呼ばれるようになった由来として、江戸時代に「九官」と名乗る中国人がこの鳥を持ち込んだときに、「この鳥は吾(われ)の名を言う」と説明したものが、誤って理解され定着したというエピソードが広く伝わっている。(ウィキペディア)

私の心に残る旅⑥ – 内モンゴルへの旅(その2)

樊 婷婷 (fán tíng tíng)

8月16日、17日(2日目、3日目)

16日の午前中、上海市内の観光で、豫園(明代に18年かけて造られた庭園、シャオロンポーも美味しくて有名である)、玉佛寺(清代・光緒年間 1875~1909年、ビルマから持ってきた高さ1.9mの玉仏の座像と体長96mの涅槃像が安置されている)などを見学して、16時発の飛行機で銀川に向かいました。上海からの飛行距離は2,047kmで、約3時間ですが、飛行機の点検で離陸が遅れ、結局、銀川空港に着いたのは21時頃でした。

飛行機から降りた時、私たちが待っていたのは銀色の砂を撒いたような満天の星と胸の奥までしみ込んでくるような清々しい空気で、今にも星が降るような素晴らしい夜景でした。さっきまでの飛行機の遅れによる不満や疲れなどは一気に吹き飛んでしまいました。夜空を眺めているうちに宿泊のホテルに到着しました。かなり遅いので、ホテルのレストランで軽く食事をして、皆さんはすぐそれぞれの部屋に入りました。

翌日17日、銀川市の見学です。銀川は黄河の上流に位置し、寧夏回族自治区の省都で、イスラム教の色合いの濃いところです。市区は新城と旧城(「城」は町のこと)に分れ、新城は工業地区であり、旧城は歴史遺跡が多く、国の歴史文化名城に指定されています。1038年にタングート族の王朝、西夏の都となり、1227年にチンギスハンに滅ぼされるまで栄えました。ちなみに、西夏の栄えた時代の中国は宋の時代で、宋もチンギスハンに滅ぼされ、元が全土を統一しました。



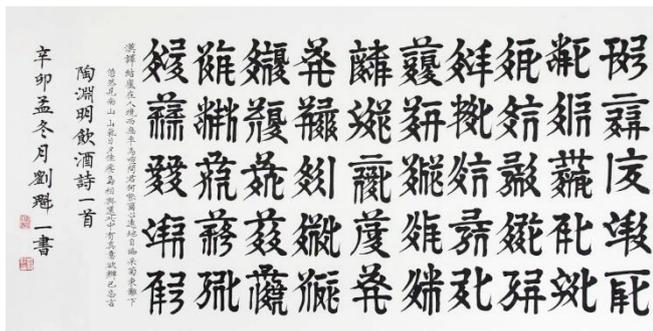
銀川市のモスク(銀川市人民政府サイトより)

私たちはまず西夏王陵に向かいました。市内から西へ35kmの賀蘭山の東麓に、西夏王国歴代の王墓が広がっていて、東西4km、南北10kmの陵園には9代にわたる王の墓と200あまりの陪葬墓が並んでいます。規模は北京郊外の明の十三陵と同等レベルです。北から南に向かって長方形となり、仏教建築の影響を受け、漢族とタングート族の民族文化が融合した独特な形となっています。その形から「東方金字塔」(東方のピラミッド)とも呼ばれています。敷地に西夏博物館も建てられ、西夏国の歴史年表や王陵の復元図などが展示されています。

西夏国が長く繁栄したのは、東西交通の要路を占めるという地理的な利点があり、宋・遼(金)との間に立って中継貿易の利を得ていたのです。主要産業は牧畜で、馬・羊・ラクダなどを飼育し、これらを宋に輸出する一方で、絹織物・香料・磁器などを輸入していました。仏教・儒教を基調とした西夏文化が栄え、西夏文字も作りました。日本では西夏文化についてかなり研究しているようですが、中国も今、西夏国の史跡、文化、文字の保存と研究に力を入れています。

どこまでも続くこの荒涼たる黄土大地を目の前にして、私は思わず「当時の西夏の繁栄は今いずこ?」と思ったりしました。9代にわたる王たちは今、地下で静かに眠っています。この荒涼たる大地の上に立って、感無量です。

西夏王陵を後にして、「西部映画撮影所」に向かいました。かつて「紅高粱」や「黄土地」など有名な西部映画がここで誕生したのです。名監督のチャン・イ



西夏文字(百度百科より)

一モー(張 芸謀)と大女優のコン・リー(鞏 俐)の撮影現場での写真もあります。見学しながら、いろいろな映画のシーンを思い出しました。

その後、承天寺塔の見学です。1050年に建築され、清代乾隆年間(1736~1796)に地震で崩れましたが、嘉慶年間(1796~1821)に再建されました。レンガ造りで、高さ64.5mの八角11層の塔で、木の階段があります。歴史を感じさせる、落ち着いた雰囲気塔です。境内には寧夏博物館がありますが、時間の都合で割愛しました。

夜、私たちは西夏文化・芸術をピーアールするコンサートに行きました。民族舞踊、器楽、歌、詩を満喫すると共に、この素晴らしい文化をぜひ残してほしいと心から思いました。

8月18日(4日目)

朝8時にホテルを出て、まず賀蘭山の岩画を見に行きました。銀川市内から車で約1時間離れている賀蘭山の北部にあります。溪谷の両岸600m余りの岩壁にデフォルメ(変形)された人面画、牛、羊、狩猟図などの絵や西夏文字が数万点以上刻まれていて、約4000年前から1000年前にかけて遊牧民が描いたものと推定されているそうです。いろいろな面白い、ユニークな絵から古代人の考え方や生活ぶりを想像できるような気がします。

賀蘭山の岩画を後にして、私たちは水洞溝(明代の長城の遺跡)に向かいました。銀川市から60キロの場所にあり、中国で発見された遺跡のうち、発掘された資料が最も豊富な遺跡の一つで、1988年に国の重点文物と指定されました。広大な敷地の中に私たちと3、4人のフランス人の以外に、ほかの観光客は1人もいませんでした。日本人とフランス人は遺跡や発掘文物に対して特に興味があると聞きましたが、確かにそうだと思います。

お昼ご飯の後、寧夏で最大のイスラム寺院、南関清真寺の見学です。銀川の街は銀川駅がある新市街と史跡やホテルがある旧市街に分かれ、旧市街にある南門は小型の天安門と呼ばれています。南関清真寺もこのあたりにあります。1644年に南門外で創建、1915年に城内へ移築され、1953年まで拡張が行われ、敷地面積13,000平方メートル以上となりました。文化大革命の時にかなり破壊されましたが、1981年に再建され、とても立派で厳かな寺院です。



内モンゴルの大草原(内モンゴル自治区政府サイトより)

その後、一行は16時発車のフフホト(呼和浩特)行きの列車に乗りました。フフホト(呼和浩特)はモンゴル語で「青い城」という意味で、モンゴル族(約12%)を中心に36民族が住む内モンゴル自治区の省都です。市内はすでに近代都市に変貌し、すぐ近くに見渡す限りの大草原があるとは到底思えません。町の看板にはモンゴル文字を併記したのも多く、独特の雰囲気を醸し出しています。

夜中1時半にフフホトに到着しました。終点ではないので、ほかの寝ている乗客に迷惑を掛けないように車内に電気をつけないまま、一行は暗闇の中、そっと自分たちの荷物を取って急いで下車しました。まるで夢の世界でした。

迎えに来た現地の旅行社の車に乗ってホテルに向かいました。人と荷物は全部無事であることを確認してほっとしたとたん、急病人発生! 団長のMさんが腹痛を起し、顔は真っ青で、立っていられなくなっていたのです。私は大慌てで、みんなをホテルに送ってから、すぐガイドと一緒にMさんを病院に連れていきました。診察の結果、腸閉塞と判明、すぐに手術が必要だが、親族がそばにいないため手術はできないと言われました! 応急措置をして貰い、すぐに朝の上海経由日本行きの航空券を手配して、副団長Wさんが付き添って日本に戻りました。結果としては無事でしたが、その時はとても心配で、一睡もしませんでした。今後、皆さんを旅行に引率する時は、健康診断書の提出が必要だ! とその時に思いました。

ちなみに、Mさんは日本に戻ってからすぐ入院して手術を受けました。その後、回復しましたが、もし、更に一日遅れると命にかかわる大変なことになったと聞いて、冷や汗をかきました。

〈ラフカディオ・ハーンとは〉

パトリック・ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn 1850・6～1904・9 享年 54) は、イギリス陸軍医でアイルランド人の父 (チャールズ・ブッシュ・ハーン) と、ギリシャ人の母 (ローザ・アントニオ・カシマチ) との間に 1850 年 (嘉永 3 年) 6 月 27 日に、地中海にあるギリシャのラフカダ島で生まれた。だから、ミドルネームにラフカディオとつけられたのである。ラフカダ島は、当時イギリスの保護領であり、父はラフカダ島に駐屯していた時、島の娘ローザに夢中になった。イギリス国籍のハーンは父の出身地であるアイルランドのダブリンで育った。ハーンがイギリス国籍なのは、アイルランドがまだ独立国ではなかったからだ。16 歳の時、遊んでいるうち不慮の怪我で左目を失明した。イギリス、フランスで勉強した後、19 歳でアメリカに渡り、新聞記者を振り出しに、フランス文学の翻訳家、小説家、随筆家として名を揚げた。1890 年 (明治 23 年)、39 歳の時、アメリカ合衆国の出版社の通信員として来日したが、直ぐに通信員を辞めて、島根県松江市で中学校の英語教師となった。5 年後の 1896 年に 45 歳で、27 歳の小泉セツ (1868・2～1932・2 享年 63) と結婚した。と同時に日本に帰化し、小泉八雲となった。日本人の風俗、習慣、伝説、信仰などを見聞した体験に基づいて研究を深め、忘れ去られようとしていた日本の姿を欧米に伝えた。『知られざる日本の面影』、『心』、『神国日本』、『怪談』など、日本への深い愛情を示す随筆・作品を英語の名文で書き続けた。

〈曾孫・小泉凡と会う〉

私・和田宏は、今から 30 年前の 1995 年、当時 34 歳の小泉八雲の曾孫・小泉凡 (ぼん) さんと面会し、色々とお話を聞かせて貰ったことがある。凡さんは、当時、成城大学大学院修了の若々しい青年で、大阪青山短期大学や島根県立女子短期大学の講師を務める傍ら、八雲が住んだ島根県松江市の旧居の隣にある「小泉八雲記念館」学芸員として働いていた。以



和服のハーン(1891年) 孫・小泉時の所蔵

下の文章は、凡さんが、私に話してくれたことをそのまま、書いたものである。

※—※—※—※—※—※—※

曾祖父の八雲は、“片道切符で旅をした人”と言うか、ギリシャで生れて、アイルランドで育って、イギリス、フランスで学生時代を過ごして、それから無一文でアメリカに渡って、更に日本に来たという形で、生涯漂泊をしていたと言ってもいいのではないのでしょうか。時々、自分で何か血を引いているのかなと感じることがあるのです。それは、私も小さい時から旅が好きで、小学生の頃から、“一寸行って来る”と、北海道まで行って親を心配させたり、学校の人を心配させたりしたこともあって、放浪癖というか、そういうものがありました。今でも、旅が私自身の人生の中の原動力になっていると思うのです。

私は学生時代に民俗学を専攻しました。旅好きから入った民俗学ですが、日本の生活文化の歴史を探るということに興味があったのです。後で振り返ってみますと、小泉八雲も 100 年前に同じようなことをやっているのです。それを、民俗学を勉強し始めて気が付いたような訳です。私も結果的に、やはりハーンと似たようなものに興味を持ったのかなと思ったりもします。

ハーンが巡り歩いた各地に私も一応一通り旅をしましたが、ハーンがそれなりに愛した町と言うのは、何かしっとりとした落ち着いた町が多いのです。例えば、ハーンの生まれたギリシャ西部のラフカダという島でさえ、ギリシャの中では非常に湿度が高く、雲がよく湧くところです。ハーンが育ったアイルランドも同じです。アメリカでも一番長く居たニューオーリンズは、所謂アメリカと言ってもクレオール文化があるところで、ヨーロッパ系とアフリカ系が混血した人達が話す言語や文化が今でも色濃く残るところです。そして、かなり湿度が高くて、その意味では一寸アメリカらしからぬ部分を持った町です。それからハーンが日本に来る前に滞在したカリブ海の仏領西インド諸島のマルチニークという島があり、私も訪れたんですが、ここも、熱帯の島の割には貿易風が吹いて過ごし易く、同時にサハラ砂漠の黄砂があったりして、松江と同じような黄色い空になるので、ハーンは、松江の空気の感触がたまらなく魅力的だと、書いているのです。東京が嫌になって、私は松江に住んでいるんですが、ハーンが日本の中で最も愛した町の一つで、私自身、何か落ち着くというか、安堵感を覚えるのです。やはり、血の繋がり of 所為かなと思うのです。

※-※-※-※-※-※-※

〈両親と離別、左目を失明〉

父親のチャールズが西インド諸島に赴任中の1854年、母親のローザは、アイルランドは寒いと言って4歳のハーンを残してギリシャに帰国してしまい、両親が離婚。父チャールズは別の女性と再婚。ハーンは、両親と再び会うこともなく、父方の大叔母に育てられた。厳格なカトリック信者だった大叔母に育てられた経験が原因で、ハーンは却ってキリスト教嫌いとなり、ケルト原教のドルイド教に傾倒するようになった。家庭の温かさを知らない寂しい少年時代を送った。夢ではしばしば怖い幽霊を見た。16歳の時、回転ブランコで遊んでいるうち、友達が放したロープの結び目が左目に当たって失明した。極度の近視だった右眼一つで読書をし、文学作品を創作し続けた。

凡さんによると、「ハーンにとって失明したのは致命的なことで、生涯、容貌の醜さを大変気にして、写

真を撮る時は、見苦しい左目を隠して、うつむき加減や横向きの写真しか残っていないの



ハーンが描いた船幽霊
(岩波ジュニア新書「ラフカディオ・ハーン」掲載)

です。しかし、ハーンにとっては逆作用と言うか、文学の仕事の上で良い方に働いたようです。と言うのは、限られた視力しかいないため、その分、自然に聴覚とか嗅覚とか感性とかいうものがウェイトを占めるようになってくるのです。物を見る時でも眼だけでなく感性・聴覚を駆使しています。例えば、日本に来て初めて書いた『知られざる日本の面影』がありますが、その中で神々の国の首都として松江を描写し、下駄の音とか物売りの声とかを取り上げ、音で物を捉えて行くのです。それは聴覚で文章を書いて行く、目が悪かったからこそ、感性が研ぎ澄まされて行くのではないのでしょうか。それが今でも新鮮に読み取ることが出来ます」

〈結婚で帰化・改名〉

ハーンは、1884~1885年に開催されたニューオーリンズ万国博覧会で農商務省官僚の服部一三から日本文化を紹介され、高峰讓吉にも出会い、ニューヨークで読んだ英訳『古事記』などの影響で日本に行ってみようと思立った。1890年(明治23)4月、39歳の時、横浜港に着いた後、東京から遠く離れた松江を選んだ。そして1896年2月10日、ハーン(45歳)は、小泉ハツ(27歳)の戸籍に入夫する形で結婚して日本に帰化し、『小泉八雲』と名乗る日本人に生まれ変わった。妻の『小泉』を姓とし、松江市の旧国名の“出雲”にかかる枕詞の“八雲立つ”に因んで、名を『八雲』とした。

古事記や日本書紀に出てくる日本最古の短歌が、須佐之男命(すさのおのみこと)の

“♪八雲立つ出雲八重垣妻籠みに 八重垣作るその八重垣を♪”

である。

つづく

みんなの広場

訃報

長らくわんりいの「漢詩の会」で、講師として興味深いお話を聞かせてくださっていた植田渥雄先生が、2025年2月16日ご逝去されました。

先生の最近のご体調に鑑みて、冬の間は休講にして、春を待って再開をお願いする予定でしたので、急な訃報に接し、関係者一同驚きと共に、残念な思いでいっぱいです。

植田先生の、わんりいに対する長年に亘るご指導に、改めて深く感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈り致します。

▶▶薬膳座学開催◀◀

3月12日、玉川学園コミュニティーセンターで、薬膳講習会（座学）を開催しました。当日は13名の方が参加され、会員の趙迪さんにお話をお願いしました。

初めての座学で、趙さんには薬膳の基本からお話して頂くことにしましたが、5千年の歴史を持つ薬膳を言葉で説明するのは難しく、皆さんに「薬膳とは難しいものだ」との印象を与えてしまったようです。

次回からは、春夏秋冬各季節の薬膳料理講習会の前に、料理の材料や調理法に込められた薬膳の考え方をやさしく解説していただく事から始めようという方針転換をします。つまり薬膳の考え方をより具体的に勉強出来るわけです。

皆さま、是非ご参加ください。

▶▶春の薬膳料理講習会◀◀

- 日時：4月18日（金）10：00～
- 場所：麻生市民館 料理室
- 講師：趙 迪
- 会費：2000円
- 持物：エプロン・三角巾・筆記用具
- 申込：4月9日までに 代表・寺西まで

☎044-986-4195

▶▶2025年度会費納入のお願い◀◀

今年も桜が満開になる頃に、無事、4月号をお届け出来ました。これも皆様のご支援あつてのことです。深く感謝申し上げます。

新年度の開始に当たっては、“わんりい”の活動を支えて頂くための会費納入を、例年と同様をお願いしなければなりません。

昨今はお米を始めとする生活必需品の値上がりが著しく、皆さんもいろいろとご苦勞なさっているものと存じます。そんな折に会費納入のお願いを申し上げるのは心苦しいのですが、“わんりい”のお便り発送はひとえに、皆さんの会費に拠っています。経費を節減し、数年来の会費（1800円）に据え置きますので、同封の納入用紙をご利用のうえ、納入くださるようお願い致します。また、料理講習会などでお目にかかる機会がある場合には、その折に、御納入頂けると幸甚です。

なお、納入用紙が同封されていない場合は、既に納入頂いたことを意味します。

よろしくお願い申し上げます。

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

散る桜

残る桜も 散る桜

良寛

mǎn shù huā fēi luò
満樹花飛落

cán yīng yǒu jǐ duō
残櫻有几多

植田先生を偲ぶ

植田先生の訃報に接してわんりいへ寄せられた皆さんの追悼のお便りです。誌面の関係で少々省略した部分もありますが、纏めて、先生への追悼のページとさせていただきます。(順不同)



■花岡風子

私は以前からわんりいの読者でしたが、2016年4月に初めて植田渥雄先生の論語や漢詩講座に参加しました。わんりいの創始者田井光枝さんから「漢詩の会の感想文を書いてみない？」とおっしゃって頂き、わんりい誌上に「漢詩の会報告」を書くようになりました。校正の段階で、植田先生に見て頂くと、「なかなか面白い」と励ましのお言葉を頂いてから、ほとんど毎回出席し、1時間半の講義のうちでもっともキラリと光っていた先生のお話と講座の様子を切り取り、他にはない漢詩講座の魅力を伝えたいと意識して報告記事を書き続けて来ました。

今年は、私にとって10年目に入るはずでしたが、先生は去年から酸素吸入をしながらご講義いただいております、その並々ならない情熱に心から敬意を抱くとともに、ご体調をおしてまで、町田の公民館まで来られていることに、本当に申し訳ない気持ちでハラハラしておりました。出来れば私たちが、先生のご自宅の近くに行くことはできないだろうかとさえ考えました。

年末から体調を崩されておりましたので、心配しつつ、3月にはお目にかかれるだろうと楽しみにしておりましたが、実は2月に何度も何度も先生のごことが頭に浮かんでおりました。今回の訃報をお聞きした時に、驚きの反面、やはり、頻繁に先生のごことが思い起こされたのは、私もどこかで察知していたのだと腑に落ちました。

振り返れば、この10年、私なりの拙文をいつも先生は面白がって添削して下さい、校正の佐々木大兄が綺麗な記事に仕上げして下さいのおかげで、毎月延々と書き続けて来ることが出来ました。まだまだ先生のご講義を聞きなかったのに、慣れ親しんだ時代に突如「ピリオド」が打たれたこと、まだ信じられ

ないような気持ちです。

先生の訃報を聞いた夜、先生と積み重ねて来たやり取りと原稿になった冊子の束をめぐっていたら、たまたまなくなって、満月を見上げに外に出ました。

「私には書けない文章で、面白い!」「毎回楽しみにしている」と言ってくださった先生。私の個性を評価してくださった貴重なお一人でした。

漢詩を語る時、いつも作者の人生物語や時代背景を印象深く、独自の視点を交え、イキイキと教えて下さいました。私の中で、このスタイルがすっかり身に付いて、今では、オンラインで先生と同じ視点で漢詩を紹介しています。植田先生がいらっしゃらなかったら、先生のご講義が受けられなかったら、私も今自分の漢詩講座をやっていることはありませんでした。先生に最後にお会いしてお礼を伝えられなかったことが残念です。

…あの日の満月の月の光は、不思議と包み込むように優しく、白く輝く光の向こうに本当に先生がいらっしゃるような気がして、涙にくれる夜を過ごしました。

先生、漢詩の素晴らしさを教えて下さり、本当にありがとうございました。不肖の弟子ではありますが、先生の薫陶を受けた一人として、これからも精一杯、古の詩人たちの喜怒哀楽に満ちた、唯一無二の人生ストーリー、時空を超えて現代に伝わる味わい深い詩の世界を伝えていきます。また一方で、先生がよくおっしゃっていた日本と大陸の人々は、往来と交流によってあまたの物語を紡ぎながら、現代にまでも共通の文化を脈々と紡いできたという、この素晴らしい世界観も伝えていきます。

先生のご講義、先生の漢詩に対する情熱は私の中で、いつまでも生き続けています。本当に有難うございました。心から感謝をこめて……花岡風子

■栗生将信

長身瘦躯、時に柔和な表情をされる。漢詩にまつわる中国文化についての豊潤な蘊蓄を語り、尽きない。教室では最前列に座っていた。私の、忘れ得ぬ漢詩と漢字文化圏についての思い出――。

▽「唐詩三百首」 中国東北部へ旅行した時、子供向けのカラーイラスト入り読本を買った。そこに駱賓王の「干易水送人」がある。秦の始皇帝の暗殺のため、荊軻が送られる。「史記」や「戦国策」の刺客列伝にあり、教室でも取り上げられた。陳凱歌監督により映画化され、「始皇帝暗殺」のタイトルでの日本公開、東京・新宿の映画館で鑑賞した。原題は「荊軻刺秦王」。配給会社の招きで陳監督が映画館に来ることを知り、私は、読本を抱えて監督が来るのを待った。ロビーに現れた陳さんの偉丈夫な体つきと魁偉な顔立ちに圧倒された。おぼつかない中国語で話し掛ける。この本にぜひ、サインして下さい、と黒のマジックペンを差し出した。彼をエスコートしていた男が私を制止しようとしたが、陳監督は気軽に応じ、私が開いたページいっぱい作品の題名と自身の名前を書き付けて下さった。映画好きの私のお宝になった。

この詩は教室でも植田先生が講義されている。私は本を先生にお見せしたが、何も言って下さらなかった。

▽贏(yíng) シニアマンションに妻と暮らして13年になる。近所に住むハルビン生まれの女性Fさん(50)は軽食堂を教室代わりにして、もっぱら漢詩を暗記させる。初めに習ったのは杜甫の「春望」。週に1回、1首ずつ高齢者の生徒10名が発表する。彼女は小学校で、数十もの漢詩を暗唱した、と言う。今なお、忘れることはないらしい。私は別の仲間と中国へ団体旅行した。鴨緑江を望む丹東の土産物屋に篇額があり、「贏」の字がある。それをメモした。意味は、「利得、もうける」の意と知る。私の話を聞いて彼女はこの字を亡、口、貝、月、凡の順に1ずつ区切って発声し、ことわざ風に言って覚えたそうだ。町田の教室で、私は漢詩の字句を繁体字と簡体字でノートに書いては漢字の自習をしていた。先生はご存じであつたらうか。

▽図書券 植田先生は石川忠久先生と桜美林大学孔子学院で、漢詩コンテストの審査員を務めていた。私は「香爐峰下新卜山居」(白居易)を発表し、審査員に異論があつたが、図らずも審査員特別賞の賞状と図書券をいただいた。植田先生の推しがあつたおかげと、感謝している。

■水谷もも子

かつて桜美林大学の孔子学院に漢詩発表大会という行事がありました。当時孔子学院で中国語を勉強していた私は漢詩の知識などほとんどなかったのに、その漢詩発表大会にて無謀にも同級生3人で『長恨歌』に挑戦しようと思いました。事務局に「どなたかに指導していただけないですか？」と相談しに行った時、偶然事務局でコーヒーを飲んでいらした植田先生にお目にかかったことを機会にご指導を仰ぐことになったのが先生との出会いでした。

この漢詩発表大会のご縁で「わんりい『漢詩の会』」へも参加させていただくことになりました。『漢詩の会』で植田先生のお話を伺ってからというもの、ますます漢詩の魅力にとりつかれた私は、その後毎年漢詩発表大会が来るたびに、自作の人形を使った人形劇を披露したり、創作にまで手を伸ばしたりとやりたい放題でしたが、先生はそんな私をいつも温かく見守って、励ましてくださいました。ある時は「今度はこの詩を使って、人形劇をやってみたら？」とご提案をいただいたこともありました。ただ残念ながらこの企画は大会側から「今後は過度な演出は不可」とのお達しがあつて実現できませんでした。

「わんりい『漢詩の会』」は毎回心が満たされる忘れがたいひとときでした。植田先生のお話を伺うと、遠い昔の中国の人々も現代の私達と同じ様に悩んだり悲しんだりしたのだと、身近に感じることができました。また先生の中国語の朗読は感情のこもったお声が素晴らしく、その後一人一人が先生のご指導で読める様になるという大変得難い体験でした。

また会の皆さんも中国通の方ばかりで、皆さんからもたくさんのお話を学ばせていただいたので、この会が解散するのは大変残念です。

植田先生のご冥福を心より御祈申し上げます。

■後藤芳昭

植田先生には、町田で月1の定期的で開催されていたわんりいの「漢詩の会」で初めて警咳に接する機会を得ました。当時のテキストや月刊誌「わんりい」を探すと2019年2月でした。

当時、僕は、中国の文学やテレビドラマ、映画などから中国文化を知るためには漢詩の理解を深めないといけないと思い始めていた頃で、わんりい誌上で「漢詩の会」を知りました。講師の植田先生は、桜美

林大の名誉教授でなんと我が娘の恩師でもありました。親子2代で先生のお世話になったわけです。先生も娘のことを憶えていてくださいました。

初講義は、「八月湖水平」で始まる孟浩然の「洞庭に臨み張丞相にたてまつる」でした。

作者の唐時代の背景、来歴、交友関係、性格などの解説も巧で、詩の解説も臨場感あふれとても分かりやすかったことを思い出します。

以来6年近く毎月の町田詣で先生のファンとなりました。

先生の魅力は、遠くかけ離れた昔の中国の漢詩を通じ、現在に生きる私たちに多くのヒントを示してくださった点にあると思います。

ここ数年、病をかかえながらの講義、本当にありがとうございました。

聖恩、禽獣に及ぶといいますが先生の聖恩に感謝し、ご冥福を心よりお祈りします。

■福島裕子

私が「漢詩の会」に加えて頂いたのは10年ほど前、中国語を習い始めると同時でした。先生の解説は奥深く、その作者の人間性、漢詩の持つ歴史的背景や状況まで、つぶさに教えてくださいました。みんなでその詩を読む時には情景が目浮かぶようでした。

中国語を学び始めて最初に発音の難しさにギブアップしそうになりましたが、好きな漢詩なら何とかなるかもしれない、とかすかな望みをかけてこちらの会に通わせて頂きました。

参加者の皆さんは見識も深く熱心でいらっしゃいましたが、中でも一人忘れられない女性がいます。水谷さんは漢詩の発表大会に出場され、その年は人形劇形式で漢詩を朗読しながらパフォーマンスされたとのこと。報告を兼ねて、勉強会の時に見せて頂きましたが、手作りの人形や小道具の精巧さに舌を巻きました。

当時私は娘の高校のPTA活動に熱を入れていました。PTAには中国人のお仲間も多く、学校には交換留学の中国人学生もいる環境でしたので、高校生が学校で学んだ漢詩を、留学生の力を借りて母親に説明するという筋立ての人形劇を創作し、水谷さんから人形と小道具をお借りして文化祭で上演しました。

その詩は「上山菜靡蕪」（山に上りてビブを採る）と言うものでした。山に山菜とりに行った女が別れた夫に偶然出くわし、新しい妻のことを訊ねます。夫は（若くて美しい）新しい妻のことをお前より織物の技量が劣ると愚痴を言います。元妻は美しい絹を日に五丈余り織ったのに対して、新しい妻は質の劣る布を日に四丈しか織れないと言います。「それでも男の本心は分からない」と植田先生はみんなを笑わせました。

植田先生による漢詩の会では、時代を超えて伝わる高潔な漢詩ばかりで無く、こうした庶民の気心を歌った詩を教えてくださいました。そうした漢詩の持つ奥行き深さにも感じ入りました。

■本田幸枝

植田先生のごことはネットに上がっていた詩経や楚辞の講義録がきっかけで知りました。難解な内容の漢詩も七五調に収まるよう工夫した訳が添えてあり、理解が進むだけでなく、日本語として面白く楽しく親しむことができました。

そんな植田先生の講義が聞ける場があると知り、わりい「漢詩の会」に参加しました。先生の講義は面白く、丁寧な解説とお茶目な小話を毎度楽しみにしていました。一度私がリクエストした漢詩を取り上げて頂いた時は、巷の解説書とは異なる最新の解釈を直接お聞きすることができました。本当に貴重で嬉しく素晴らしい体験でした。

もう先生のお話を聞いたり、新しい訳を読んだりできないことがとても残念です。まだ参加して二年ほどでした。もっともっと沢山のお話をお聞きしたかったです。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

■佐藤三祿

孔子学園で数年、その後「漢詩の会」でご指導を受け、幅広く含蓄のあるお話に毎回沢山の示唆を頂きました。今も事ある毎に古いプリントを引っ張り出して参考にしております。お身体を無理して講義に来て下さったのではないかと、感謝のほかありません。素敵で素晴らしい先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

■木ノ内せつ子

植田先生の漢詩の会は、2011年10月20日に始まり、2024年6月30日まで、12年余、原則月1回の

ペースで続けました。「漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで、漢詩のすばらしさを味わおう！」と銘打ってスタートした漢詩の会。3回目までは京劇の殷秋瑞さんが講師でしたが、お仕事の都合で辞められて、4回目から植田先生を講師に迎えて再スタートしました。植田先生の朗読もすばらしく、私は録音して家で何回も鑑賞しました。50年前の高校時代の漢文の授業は、読み下し文までで、それを中国語で読むことなど考えられませんでした。中国語の学習で、私は「四声」が特に苦手でした。アクセントは「強弱」だけだと思っていましたから、「高低」というのがなかなか理解できませんでした。植田先生の漢詩の読み指導でそれが分かりかけてきました。コロナ禍で、植田先生の朗読のご指導が少なくなってしまったのはとても残念でした。

漢詩の会だけでなく、わんりいが参加している、あさおサークル祭でも植田先生は講演をしてくださいました。毎年実施されるサークル祭の2016年から2019年の4回、「論語」をテーマにお話されました。私の印象に残っているのは、何回目かのときの「学習」という言葉です。「学」は「真似ること」、「習」の原義には「繰り返して確かなものとして身につけること」「学而時習之、不亦说乎？」(学んで時に之を習う、また説ばしからずや) ヒナが巣立つために何度も羽ばたく練習をする。これが学習すること、と非常に分かりやすくお話してくださいました。

また植田先生には、2014年11月からわんりいの紙面に「論語あれこれ」や「漢詩の日本語訳」を2024年7月まで42回に亘って投稿していただきました。

これから先、わんりいの紙面で、植田先生のご指導が頂けないのは本当に残念です。

こころよりご冥福をお祈りいたします。

■吉光 清

小生が「漢詩の会」に参加を始めたのは、参加者の皆さんとは異なる、バカバカしい、申し訳ない動機からでした。それは、中国語の学習を70の手習いで始めた頃で、どうもピンインというのがピンと来なくて、なかなか脳内にインして来ないのです。ピンインと直に触れ合う機会を増やそうと参加を決めたのです。

高校時代の教科には「古文・漢文」があったので、

良く知られた漢詩に関する最低限の知識は得られましたが、中国語で詠むことなど思いも寄りませんでした。

コロナ禍以前の「漢詩の会」では「詠む練習」の比重が大きかったので、皆さんの発音の素晴らしさに、冷や汗を掻きながらもピンインを強く意識できる、とても有難い時間でした。しかし、それ以上に、植田先生の学識の深さと博識さ、時々漏らされる個人的な述懐の面白さにすっかり魅了されてしまいました。

コロナ明けで再開された会では、運営のお手伝いのようなことをしながら、中央公民館に到着される先生のお出迎えを担当していました。先生のお話は、かつて纏めた内容をそのまま話されるのではなく、直前までいろいろと調べ直されていて、毎回、かなり早目に到着され、講義内容を確認していらっしゃるようでした。

「漢詩の会」で先生のお話を聴けたことはとても有難いことでした。コロナ禍で大事な時間を失ったことを本当に悔しく思います。

ご冥福をお祈り申し上げます。

■有為楠君代

植田先生に初めてお目にかかったのは、わんりいが「漢詩の会」を始めて、3カ月ほど経った頃でした。

漢詩を中国語で勉強したいとご講義をお願いしたところ、快くお引き受け頂き、特に漢詩を中国語で習いたいという希望をととても喜んでくださいました。

先生のご講義では、第一回に李白、第二回には杜甫と、よく知られた詩を選び、発音をみっちりご指導くださいました。毎回取り上げる詩を2首に搾り、発音と詩の背景、詩人の人となりや生涯をユーモアまじりにご紹介くださる「漢詩の会」は、発音練習が短くなりましたが、益々参加者が多くなりました。

先生が体調を崩されて、夏と冬は休講となりましたが、皆さまが会の開催を楽しみにしておられるのを感じて、先生にはついご無理をお願いし、「6月の初めはまだ暑くない」、「9月の終わりはもう暑くない」更には「11月初めなら、3月の終わりなら寒くない」とついついご無理をお願いしておりました。

今、先生の訃報に接して、忸怩たる思いを禁じ得ません。ご冥福を心よりお祈り致します。

【わんりいの催し】

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！
身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：玉川学園コミュニティーC 多目的室3
- 日時：4月22日（火）10：00～11：30
5月20日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：2,000円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### ∞∞わんりいの中国語勉強会∞∞

- 場所：鶴川市民センター
- 日時：毎週火曜日 14：00～16：00
- 講師：郁 唯（天津師範大学卒業）
- 会費：5000円（会場費・講師謝礼）
- 定員：10名（原則として）
- 申込：柳田 ☎090-4677-7793  
e-mail:yanagita\_hi@yahoo.co.jp



#### ■定例会 代表宅

- ▼4月10日（木）13：45～
- ▼5月8日（木）13：45～

#### ■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼5月号 5月1日（木）
- ▼6月号 5月31日（土）

## ☆☆ 編集後記 ☆☆

3月には日本各地で山林火災が発生し、今までにない大きな被害を被りました。宮城県の大船渡市では、多くの人家まで飲み込む広範囲の山火事が発生し、過去最大の被害となりました。

従来から、春は山火事が多い季節とされていますが、今年は大船渡に続いて起こった岡山県や愛媛県でも、各地で過去最悪の被害を引き起こしています。今年は何年とどう違うのでしょうか。

大船渡の火災は、当時この地方では雨が少なく乾燥していたのと、海からの温風が原因だそうです。この海からの温風は、黒潮が三陸沖まで北上していたのが原因で、水産物の異変と共に、これも地球温暖化に由来すると言われています。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎いたします

年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい

10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 302号の主な目次

- 「中国薬膳の起源と発展」(2)……………2
- 「中原雑感」(50)鄭州・安陽一人旅（続1）・3
- 晩秋のカラコラムにて(3)……………5
- 「九官鳥」……………7
- 私の心に残る旅⑥
「内モンゴルへの旅」（その2）…9
- 「ラフカディオ・ハーン」……………11
- みんなの広場……………13
- 植田先生追悼のページ……………14
- ‘わんりい’の催し・お知らせ……………18